

「原子力安全神話」教育から「放射線は怖くないぞ」教育へ転換 ～ 文部科学省「放射線副読本」! の不道徳 ～

「道徳教育」や「心の教育」に熱心な文部科学省だったが、どうやら一番それが必要だったのは文部科学省自身だったようだ。文部科学省は10月付けで『放射線について考えてみよう(小学生対象)』『知ることから始めよう放射線のいろいろ(中学生対象)』『知っておきたい放射線のこと(高校生対象)』の副読本を発行した。間もなく学校現場に下りてくることになる。ホームページ上にアップされているので見ることができる。

「原子力安全神話」を全国の児童生徒に刷り込むために作成された『わくわく原子力ランド(小学生)』などの副読本は福島第1原発事故によって社会的批判に晒されたことから新たに作り変えたものだ。これだけの大災害を引き起こした当事者の一人であるわけだから、従来の原子力政策のどこが間違っていたのか、現実には起きている放射能汚染による被害に対する見解など当然示さなければならないはずだ。

しかし、原子力発電の文字が登場するのはほんのわずかで、原発事故については「東北地方太平洋沖地震(マグニチュード9)によって東京電力福島第1原子力発電所で事故が起こり、放射性物質が大気中や海中に放出されました」とまるで他人事のような記述である。

全体の構成は、医療・農業・工業などの産業分野における放射線利用と、身のまわりの自然放射線の紹介で占められている。放射能や放射線を持つ危険性の記述はわずかで、多くの国民や子どもたちが心配している内部被曝問題は皆無に等しい。

自分が誰かに迷惑をかけたなら、まず己の非を認め謝罪するのが人の道というものだ。彼らは今回の福島原発事故を「自然災害」に括り、責任回避する意図があるからこそこうした厚顔無恥な資料を平然と出せるのだ。学校現場に配布する前に、福島の被災者の親や子どもたちの前でこの副読本を読み上げてもらいたいものだ。

あらため強調しておかなければならない。福島原発事故は「人災」である。地質調査から指摘された津波規模予測を不問にし、設計上にはなかった電源装置の地下室に配置など教え上げればきりがない。地震列島に核廃棄物処理の目処すら立たない原発を54基もつくった行為自体がすでに「人災」なのである。この「人災」の最大の責任者は国であり文部科学省に他ならない。言いたいことは山のようにあるが、道新(2011.11.6)の読者の声に、私が言いたい事を見事に語ってくれた人がいたので以下に紹介したい。

道新 2011.11.6

子供らの被ばく
守る義務大人に

佐々木隆夫 62
(北見市)

10月31日朝刊コラムの「卓上四季」を読み、私は文部科学省が東京電力福島第1原発事故を受けて新たに作成した小、中学生向けの放射線の副読本を読んだ。

文科省が従来の「原発安全教育」から「放射線安全教育」に転じたのではないかと思っただけだ。新しい副読本は、原発事故にほとんど触れず、健康リスクについて「一度に100ミリシーベルト以下の放射線を受けた場合、それだけの原因としてがんなどの病気になったという明確な証拠はありません」と、被ばくがんとその関係を否定するような内容には驚かされた。

福島原発事故は人類史上最悪のものであり、未来ある子供たちが今も放射能にさらされていることをどう考えているのか。これでは放射能は危険ではないという文科省の洗脳教育そのものではないか。

福島県の子供たちが政府にあてた手紙の中に「わたしはふつうの子供を産めますか? 何さいまで生きられますか」との不安が記されているという。

私はそれを知り、涙が止まらなかつた。子供たちの健やかな成長を守る責任は大人にあるのだということをおぼえてはならない。

みんなでムラサキツユクサを育てましょう!

～ ムラサキツユクサの突然変異と低線量被曝の関係 ～

年休・自費でしか参加できない研究会が3日間ほどあり、そこに参加してきた。理科の教員が30人ほど介して日頃の実践などを持ち寄り論議する。ここ3～4年ほど毎回参加しているのだが、いつも内容が濃く私にとっては貴重な「研修の機会」になっている。

その中で「放射線とムラサキツユクサの関係」を報告してくれた人がいた。興味が湧いたので調べてみると、市川定夫氏による有名な研究だった。氏は2007年～2008年に原水禁議長として、核や核兵器廃絶運動の先頭に立っていた。実は、私自身が内部被曝の問題を学ぶ上で随分と参考にしたのが氏の講演記録動画だった。若かりし頃、チェルノブイリ原発事故によって拡散した放射能が与える影響について、日本政府やマスコミ発表に敢然と反論を展開した反骨の科学者である。彼が原水禁議長に就任時のインタビュー記事が同ホームページにアップされていたので一部抜粋して紹介する。

科学技術の「発達」を考え直す必要性がある

○アメリカのブルックヘブン国立研究所生物部のスパーロ博士と共同で放射線生物学の遺伝研究を始める。ムラサキツユクサの、青とピンクのヘテロ(遺伝子の組み合わせ)は、微量の放射線と遺伝の関係を調べる上で格好のもので、放射線が生物細胞に与える影響を個々の細胞単位で直接的かつ確実に観察することが可能だった。

○ムラサキツユクサのおしべの毛は一列に並んだ細胞から成り立ち、おしべの毛は先端部分の細胞分裂を繰り返して発達。それが放射線などの影響で青の優性遺伝子に突然変異が起こるとピンクになり、それを容易に観察できる。それまで低線量あるいは微量の放射線の影響についてほとんどわかっていないのに、「微量なら安全」「微量なら無視できる」と宣伝されてきましたが、これにより、微量でも突然変異を起こすことが証明された。

○浜岡原発の試運転のときに、地元の高校の生物の先生がムラサキツユクサを使って放射線と突然変異を調べることを提案。74年から浜岡原発周辺で調査開始。試運転が始まったときから突然変異が増え、そのことが新聞・雑誌で話題になり、全国各地の原発周辺でも調査が進められた。

○私のこれまでの研究成果を活用して欲しい。それを理解してくれる人を増やしたい。特に、低線量放射線の問題や人工放射性核種と人工化合物との相乗効果などは、核兵器、原発などを廃絶するうえでも重要なポイント

○私たちは、長年にわたって、科学技術の「発達と発展」という、誤った「宗教」を信じさせられ、誤った道を辿ることを強要されていたのです。こうした事実を真剣に改めて考え直す緊急の必要性が迫っているのです」

科学技術の「発達」を考え直す必要性がある

インタビュー：原水爆禁止日本国民会議 市川 定夫議長



【プロフィール】

1935年大阪府生まれ。京都大学大学院修了。農学博士。米国ブルックヘブン国立研究所研究員、メキシコ国立チヤピンゴ農科大学大学院客員教授、埼玉大学理学部教授等を歴て、現在、埼玉大学名誉教授。その間、伊方原発訴訟や原爆症認定訴訟などの原告側証人として放射線と遺伝の関係に証言。また、ムラサキツユクサの研究は有名で、ごく低線量でも生物に影響があることを証明。1995年から原水禁国民会議副議長を務め、今年4月に議長に就任。

ユーチューブ動画に市川氏の若かりし頃の講演の様子が出ている。内部被曝の仕組みが実にわかりやすく説明されている。読者の中でまだ視聴していない人は是非見てほしい。検索名：市川定夫 放射能はいらない

ムラサキツユクサ

ムラサキツユクサ属(むらさきつゆくさぞく、学名:Tradescantia)とはツユクサ科の属の 1 つ。温暖な地域を中心に 200 種くらいが分布する。



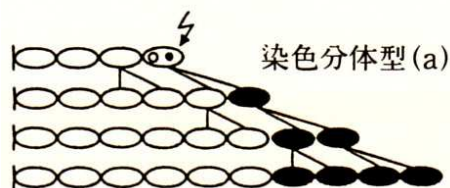
ムラサキツユクサ 「植物園へようこそ」より



おしべの毛



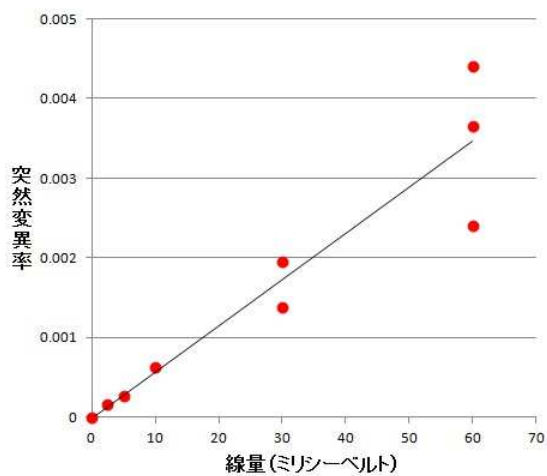
おしべの毛の細胞 「福原のページ」より



「市川定夫著「環境学」202 頁」より

ムラサキツユクサの花色は青が優性で、ピンクは劣性です。青色の遺伝子とピンクの遺伝子を持つ株は青色です。蕾にX線を当てると、突然変異で青色の遺伝子が障害を受け、ピンク色になることがあります。その蕾を 11~15 日後に顕微鏡で観察すると、雄しべの毛の一部がピンク色になり、突然変異したことが分かります。ムラサキツユクサの雄しべの毛は、突然変異を鋭敏に検出できる、すぐれた実験系です。

X線によるムラサキツユクサの突然変異



「A.H.Sparrow ら Science 176 916(1972)より」

ムラサキツユクサの蕾にX線を照射して突然変異率を調べると、線量に比例して突然変異が増えることが分かります。(上の図では各線量での突然変異率から、線量ゼロの時の突然変異率を差し引いて示しています)。

図中で線量ゼロの次の値は2.5ミリシーベルトです。

約96万本の雄しべの毛を調べ、820個の突然変異を見つけられています。

100ミリシーベルトどころか、2.5ミリシーベルトでも、突然変異が起こることが分かります。

ブログ:「[どうしたらできる温暖化阻止](#)」より一部転載